

# 柴田隆行先生追悼特集

柴田隆行先生は、二〇二一年一月の登山中の事故によりご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表し、心よりのご冥福をお祈りいたします。

今号の『井上円了センター年報』では、とりわけ柴田先生の井上円了研究に対する多大な貢献を記念しまして、『追悼特集』として二つのご遺稿『東洋哲学』の外延と内包』と「カントと『現象の救い』」を掲載いたします。快く掲載の許可をいただきましたご遺族のみなさまには感謝申し上げます。

柴田先生は一九九一年に東洋大学文学部助教授に着任し、その後二〇〇〇年に東洋大学社会学部教授に就任されました。ヘーゲルやフォイエルバッハを中心とした近代ドイツ哲学のご研究や、シュタインの法哲学、社会学についての研究など、数多くの功績を残されました。またそれと同時に、東洋大学における井上円了研究にも長きにわたって尽力され、井上円了研究センター長および国際井上円了学会長も歴任されました。

論文『東洋哲学』の外延と内包』は、柴田先生が『井上円了センター年報』第三〇号にご寄稿の予定だったのですが、完成後に事故に合われたため、掲載に至りませんでした。しかし柴田先生の最後の学術論文として大変貴重なものですので、編集委員会の校正を経た上で、今号に掲載させていただきます。

講演録「カントと『現象の救い』」は、二〇一九年一月二日に開催されました哲学堂祭記念講演会での柴田先生のご講演をまとめたものです。柴田先生は二〇二〇年三月に東洋大学を定年退職されましたが、その際、最終講義は行われませんでした。ただ、柴田先生は哲学堂祭での記念講演を、ご自身の「最終講義みたいなもの」と

もおっしゃっていました。実際この講演は、柴田先生が学生時代に決定的な影響を受けた信太正三先生、暉峻凌三先生との関わりから始まり、お二人の先生方の課題を引き受けるかたちで「カントと『現象の救い』』というご自身のテーマを掘り下げています。そして最終的にその議論を井上円了妖怪学の評価に結びつけるという論旨となっており、内容的にも柴田先生の「最終講義」として公刊するに相応しいものと判断し、あわせて掲載させていただきます。なお、この講演録で引かれている信太正三先生のご論文は、かつて柴田先生が編纂された『信太正三研究』（第一～一〇号、東洋大学付属図書館に所蔵あり）にも再掲されており、本講演録をまとめるにあたって参考にさせていただきました。

『井上円了センター年報』編集委員会

井上円了哲学センター研究助手 長谷川琢哉